

と、みやげにもらった折り箱を大事そうに抱えて、臼すり岩の下を通りかかりました。すると、ゴロンゴロンゴロン、ゴロンゴロンゴロンと、臼をまわすような大きな音がして来ました。その音が川のふちに響いてあんまりものすごいので、いっぺんはびっくりして逃げ出しました。が、「までよ、岩がひとりでに回るはずがねえな。こりゃきつとつわさのタヌキの仕業やな、タヌキのやつ、うらをからかいやがって。」



「夜な夜な石をグルグル回しているのはあいつやな。これはひとつ、とっ捕まえてこらしめてやろう。ほんでもこらしめるとたたりがおとろしいな、さてどうしたもんじゃろなあ。あ、ほうや。明正寺の功存さまに相談してみよう。なんせ、ご本山でも有名なおかたやで。」

と、あれこれ考えてるうちに、すっかり酔いが醒めてしまったお百姓さんは、急に恐くなり夢中で走って家に帰りました。

次の日、さっそく功存さまをたずねて、臼すり岩の話をしました。

話を聞いた功存さまは岩に南無阿弥陀仏と書いて、お経をあげてくださいました。お地藏さまもたちました。仏様の力にはかなわないのか、その後タヌキはいなくなり、岩も回らなくなったそうです。

#### 40 継体天皇の冠

なんでも千五百年もむかしのことやと。福井県は、「越の国」っていわれた。

そしてここを治めてた豪族で『オオトノオウジ』という人があったんや。そりゃかしこい人で新しい文化や技術をひろめて、越の国を豊かにしようと努力されていた。九頭竜川、足羽川、日野

川を改修して田んぼを作り、笏谷石を掘り出し、岡本の紙すきをひろめ……とたくさんの仕事を手がけた方々。

このオオトノウジが味真野（越前市）に住んでおられたころ、河和田を見まわりに来られたんやと。

河内の桃の木谷でな、村のもんが小さい桃をあんまりうまそうに食べていたんで、川むこうの木を一つとろうとされた。川におりて渡ろうとされたら、足がすべって冠が岩の間に落ちてこわれてもた。こんな山なかでどうしたもんやと、お供の人もあわてたんやが、村の主が、「川の川下片山と川上片山をめぐりをする村がいます。そこでおおさせてはいかががしょう。」と、申し上げたと。

こわれた冠を手にした片山の人は、村の神社にお参りして身を清めてから、うるしで美しい冠にぬりあげた。冠にそえて、自分の作った三つ組のお椀をさしあげたんやと。飯椀、汁椀、煮物の



椀どれも気に入られて、『片山椀』って名前をつけとくれたの。もっと沢山作れとおっしゃった。これが片山の漆器が盛んになるはじめやったと。

越の国をどよりも進んだ国にしたオオトノウジの評判は中央にも伝わった。五十才をいくつも過ぎてから、天皇になつてくださとお迎えがきた。第二十六代の継体天皇といわれたお方々。

### ④1 技をぬすめ

徳川幕府は、江戸のお城で諸国の大名を招いて、新年の宴会を開いた。加賀の殿様前田公は、国元の輪島で作らせた朱盃を配って御国自慢をした。越前の松平公はうらやましかった。あの技を越前にもとりいれたかった。